



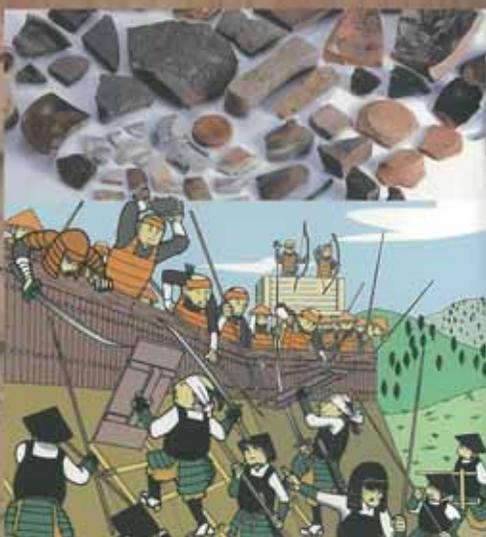
国指定史跡

増山城跡

ますやまじょうあと



ガイドブック
GUIDE BOOK



上杉謙信が三たび攻めた城

増山之事 元来嶮難之地

人衆以相当 如何^{とも}手堅相抱候間

長尾景虎書状（永祿三年） 福王寺文書

孫次山砦
Magojiyama fort

亀山城
Kameyama castle

増山城
Masuyama castle

城下町
Masuyama bourg

城下町土塁跡
Wall of soil
in Masuyama bourg

DATA

増山城跡 REPTERICAL

国指定史跡

指定の名称◆増山城跡

指定年月日◆平成21年7月23日
(文部科学省告示113号)

所在地◆富山県砺波市増山地区内
面積◆590,239.47㎡

所有者◆砺波市、個人

管理団体◆砺波市

ABOUT THIS

「城」という字は、「土」と「成」の2字から出来ています。つまり、土でできた構造物というのが本来の意味です。

城は立地条件によって、①平城、②平山城、③山城に分類されます。山城は、山そのものに普請（土木工事）を加え、郭や堀などの防御施設を作り出すタイプのお城です。

砺波市の榊野地区には、増山城という戦国期の山城があります。富山県内には大小400以上の城があるといわれますが、増山城は規模や歴史的重要性などから越中三大山城に数えられています。

さて、増山城の歴史は古く、南北朝時代（14世紀）に遡ります。江戸時代初めの廃城までの約250年



ダム湖と水没した下町

間、越中の覇権を争って戦乱の舞台となりました。

めまぐるしく城主が交代し、それぞれが修築を重ね、現在の縄張（城の構造）に到達しました。縄張は、二ノ丸を中心に二重三重の防御線を構築しています。天然の要害に作られた城は、上杉謙信をして「増山之事 元来嶮難之地」と言わしめたほど。砺波、射水、婦負の三郡の境に位置し、主郭から県西部をほぼ見渡せる眺望の良さも拠点化した理由のひとつです。

増山城の歴史年表

西暦	年号	事項
一三六二	貞治 元	二宮阿が和田城などで桃井勢と戦う
一四八一	文明十三	山田川（田屋川原）の合戦
一五〇六	永正 三	芹谷の合戦 長尾能景が一向一揆と戦い、神保慶宗の非協力のため討死する
一五四三	天文十二	神保長職が富山城を築く
一五四五	天文十四	領主徳大寺実通が越中に下向、般若野荘で殺害される
一五六〇	永祿 三	長尾景虎（謙信）が越中出兵
一五六六	永祿十一	神保長職は富山城から増山城へ敗走する
一五七二	元亀 三	増山城の神保長職が上杉氏と結び、一向一揆と戦う
一五七六	天正 四	このころ神保長職没。増山城に一向一揆が拠る
一五七九	天正 七	上杉謙信が増山城を攻め落とす
一五八一	天正 九	このころから上杉氏武將の吉江宗信が増山城守将となる
一五八三	天正十一	増山城は上杉方の拠点で「手狭之様体」となる
一五八五	天正十三	織田勢が増山城を焼き払う
一五八六	天正十四	佐々成政が越中を平定する
一五九三	文禄 二	秀吉が越中に侵攻し、成政が降伏する
一五九六	文禄 五	上杉景勝が上洛途中、中田で増山城主 中川清六（光重）の響應を受ける
一六〇三	慶長 八	光重の妻 藤、増山城から福田惣社に祈願状を与える
一六一四	慶長十九	前田利長が増山などの松物師に、伏見城などの築城のため京都勤番を申しつける
		「増山殿」と呼ばれた藤没する（四十一歳）
		最後の城主 巨海斎宗平が没する（五十三歳）

和田城の時代

増山城は、かつての「和田城」とも考えられます。南北朝時代に書かれた『二宮円阿軍忠状』には、元越中守護・桃井直常らの討伐に従軍した二宮円阿が和田城を守ったとあります。森田柿園は『越中志徴』で「和田城と云は、今云増山城なるべし」と推察しています。その根拠は、付近一帯が上和田村・中和田村・下和田村と称したの言い伝えによるもの。ただし、縄張りなどから亀山城を和田城とみる研究者もいます。二宮は幕府に敵対した桃井直常の討伐を命ぜられ和田合戦や庄城・野尻などを転戦し、貞治二年（一三六三）三月まで和田城を警固しています。

群雄割拠と越中統一

その後、増山城は永正年間（一五〇四～一五二一）まで歴史から姿を消します。越中守護畠山氏の守護代として、婦負・射水両郡に勢力をもった神保氏は、十五世紀後半頃に増山城を支配として整備し、郭配置の基礎を造成したと考えられます。神保氏の本拠である放生津城とは和田川で結ばれていました。

永正年間、越後守護代長尾能景（謙信の祖父）が一向一揆方との芹谷の合戦で討ち死にし、その子・為景が越中に進攻するなど越中国は戦乱が続きます。

芹谷の合戦

越中・加賀の一向一揆 × 越後守護代 長尾能景 / 越中守護代 神保慶宗



神保長職は富山城を築城（五四三）し、神保氏の支配は永禄年間（一五五八～一七〇）まで続きました。上杉謙信は増山城を三度攻撃しています。永禄三年、謙信は越中へ侵攻し長職を攻撃、富山城を放棄した長職は増山城へ逃れますが謙信の進軍によって再び落ちのびます。この時、謙信は書状で「増山之事、元来峻難之地…」と記しており、増山城の堅固さがうかがえます。同五年、長職は再び増山城にたてこもりますが、

上杉謙信の勢力拡大過程図





増山城の戦い「砺波市増山」

上杉謙信 × 神保方



謙信に攻められ、降伏しています。のちに一向一揆が拠りますが、天正四年（一五六六）に謙信により攻略されました。謙信没後、織田勢は北陸への進撃を強め、一向一揆の拠点である金沢御堂を撃破します。形勢不利になった上杉方は増山城を焼き、木舟城へ移りました。天正十一年（一五八三）、越中平定を果たした佐々成政の支配下となり、城はもつとも整備拡充が図られたと考えられます。これは、砺波郡南部に一向一揆勢力が隠然としており、加えて小牧・長久手の戦いで織田信雄・徳川家康と結んで豊臣秀吉に敵対し、秀吉方の前田利家と加越国境で交戦するなど軍事的緊張が高まったことが要因となりました。

富山の戦い「富山市本丸・城山」

豊臣秀吉 × 佐々成政



しかし、城を整備した成政は、同十三年戦うことなく豊臣秀吉の軍門に降り、砺波郡は前田氏の支配下となりました。増山城の守将は、前田氏の重臣である中川光重（宗半）が務めました。最後の城主光重は不在期間が長く、実質的には妻の蕭（利家の娘）が城を守りました。慶長十年（一六〇五）に蕭が書いた「ますやま城より」との書状がありますが『越中国絵図』（南葵文庫）には「増山古城」とあるので、慶長年間には廃城になったと推定されます。

乱世の終焉と廃城

* 2・3は、『TCG日本史シリーズ①戦国時代の城と戦い』（双葉社）。
* 1・4・5は、『越中国図説』（富山県歴史文化財センター）よりそれぞれトレースして改定したものである。



山城を見るポイント!

- 畝状堅堀群 (1000000) 堅堀が連続しているもの。
- 切岸 (10000) 郭などを作るときにできた人工的な急斜面。
- 郭・曲輪 (10000) 斜面を削平した平坦面で、その中心となることを主郭という。兵が駐屯する建物や倉庫、武器などを保管する倉庫が作られた。
- 虎口 (10000) 城への出入り口。
- 堅堀 (10000) 斜面をもっと急にするために掘った溝。
- 土橋 (10000) 郭と郭を結ぶ土の橋。
- 土壘 (10000) 郭の周りに土を盛り上げた堤防のようなもの。
- 縄張 (10000) 城の基本プラン。

- 堀 (10000) 敵の攻撃から郭を守るため、その周りに掘られた溝。山城では空堀、平城では水堀が多い。
- 堀切 (10000) 尾根を断ち切るように掘られた空堀。
- 櫓台 (10000) 主郭などの一角に一段と高く作られた見台。

増山城跡縄張図



二ノ丸

にのまる

8

主郭。周囲の郭は二ノ丸を守るように配置されており、敵兵がもともと侵入しにくい場所にある。手前には城跡内で唯一の石垣があるが規模が小さく、防御機能よりも権力誇示とみられる。中央に神水鉢があるが、用途は不明で手水鉢、旗台石、塔芯礎など諸説ある。北東角には隅櫓（鐘樓堂）があり、中心部でもっとも高所（124.23 m）である。二ノ丸南空堀で焼土の厚い堆積が検出されている。



法花坊峠遺構

ほつげぼろとうげいこう

13

発掘により、方一間の掘立柱建物などを検出。柱穴から底に穴をあけた土師器皿や、15世紀代の遺物が出土。中世遺構の下から古代の竪穴建物が3棟出てきたのは驚きの成果。



鐘搗堂

かねつきどう

9

無常の南にある櫓状の施設。発掘により無常と地続きだったものを堀によって分断して造成されたことが判明。南櫓台との間の堀切から鐘搗堂に登る階段状遺構を検出。時刻を報じる時鐘台であったかは不明。



安室屋敷

あむちやしき

11

構造的に二ノ丸ともっとも親密な関係にある郭。北側から東側にかけて土塁が残り、L郭とは、土橋によって連絡している。「安室」は、家督を嫡子に譲って隠居した人の住居を意味する。



亀山城跡

かめやまじょうせき

14

郭の配置などから増山城より先行する城と見られていたが、平成15年の発掘により16世紀後半に利用されたことが判明。主郭は、城跡群でもっとも高所（標高1331 m）に位置する。放生津城、守山城など射水方面への眺望が素晴らしい。



三ノ丸

さんのまる

10

「オオヤシキ」とも呼ばれる。L字状に長大な堀が巡り、敵を寄せ付けない。二ノ丸、安室屋敷の東側を守る重要な郭である。



池ノ平等屋敷

いけのびらうやしき

12

ほぼ方形の平坦面に土塁が巡る。伝神保夫人入水の井戸（池）にちなんだ名称と考えられる。平成11年発掘。出土土師器から、使用時期は16世紀前半から16世紀末。



孫次山砦

まごじやまとりで

15

東側斜面に長大な竪堀が切られている。城跡群の北端部にあって射水・婦負方向からの攻撃に備えた城と考えられる。



大手口

おおいでぐち

大手とは、城の正面玄関のこと。門が残っていないため、どこが大手か判断としない。ダムからの登山口、七曲がり、無常南側など諸説ある。



又兵衛清水

またべえししょうず

築城の際、山名又兵衛なる人物が発見したと伝える。主郭にあたる二ノ丸の直下であり、城中の重要な水源であったと考えられる。市内では瓜裂清水と並び「とやま名水百選」に選ばれている。知る人ぞ知る隠れた名水。



馬洗池

うまらいいけ

歴代城主の馬を洗ったと伝える池。二ノ丸側斜面に焼土の堆積を確認した。

無常

むじょう

二ノ丸から南に細長く張り出している郭。地名の由来は「実城」からとの説がある。東下郭を平成9年に発掘。

F 郭

えんかく

ウラナギ口からの最初の郭。16世紀代に盛土で造成された。発掘では茶道具や箸など生活道具が出土している。



E 郭 (馬之背口)

いーかく

西側の守りの要に位置するL字形の郭。城下側に土塁が巡り、七曲がりからの進入口に櫓台がある。発掘により16世紀代に郭が拡張されたことが判明。



一ノ丸

いちのまる

本来、「一ノ丸」とは本丸を指し、城主が居を構えるところの意。近世絵図にこの名が残っているため、一ノ丸と呼ぶが、構造的に本丸とは考えがたい。

城内の出土品



越前焼 甕・摺鉢

日本六古窯のひとつ
貯蔵用甕の胴部片

茶臼

茶葉をすりつぶして粉にする道具

珠洲焼 甕

14～15世紀 耐久性に優れた甕の口縁部

土師器 皿

菜種油を燃して灯明皿として使ったり、穴まがって建物跡に埋納したり

瀬戸・美濃焼

茶人の嗜好
天目茶碗

鉄釘

建築用の新造釘

砥石

花と鳥の彫刻あり

煙管

花と鳥の彫刻あり

碁石

寛永通宝

桶 底板

厚みのある桶の底板

須恵器 壺

小型の直口壺

石臼

そうり屋敷出土、旧越前町産の桑山石製

肥前系磁器

外面に呉須で描かれた文様あり

越中瀬戸 椀

鉄錆輪がわかる

越中瀬戸

茶色鉄錆がわかるのた皿

越中瀬戸 皿

17～18世紀
立山町産。
見込みに印花文押す

須恵器 杯類

8～9世紀、日常の食器類

須恵器 瓦塔片

多量塔を模したミニチュアの屋敷部

珠洲焼 壺

14～15世紀
絶産の珠洲産
須恵器の技術で作られ、日本海側に広く流通した

縄文土器

前期(縄文式)、城下町最古の土器

土鏝

機織り具+銅の鏝か

石鏝

縄文期の石製欠り

石鏝

石製の銅の鏝、上端と下端が打ち欠いてある

城下町の出土品



能景塚

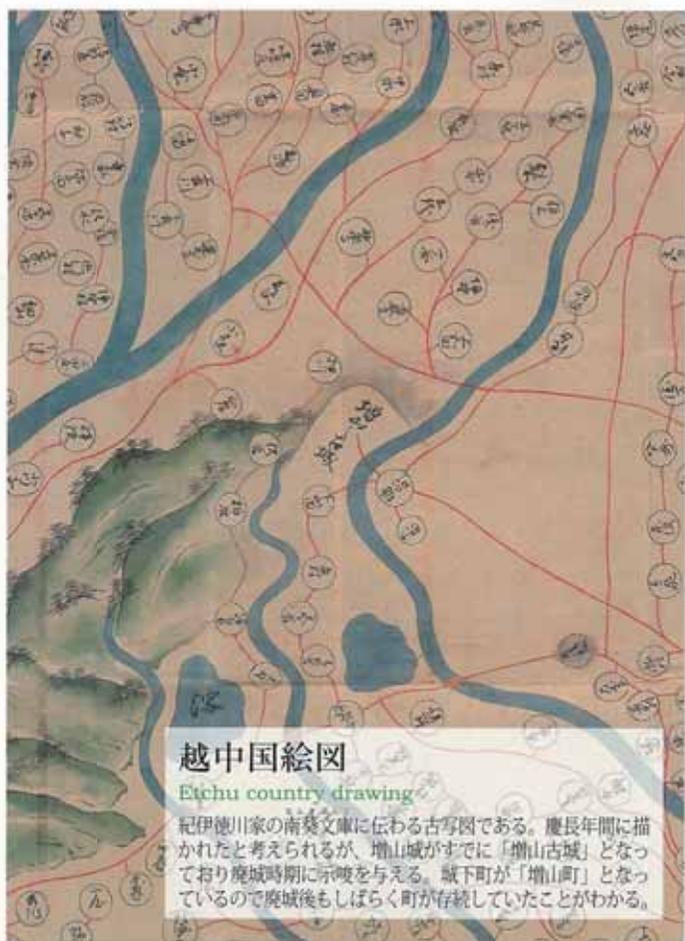


為景塚

能景塚と為景塚

Nagao Tamekage tomb

増山城の南に上杉謙信（長尾頼虎）の祖父・長尾能景と父・長尾為景の塚がある。為景の没年・没地については諸説あり、塚の真偽は定かではない。200 m東の宅地に謙信の祖父・長尾能景の塚がある。能景は芥谷の合戦で討死しており、芥谷の千光寺に位牌がある。



越中国絵図

Etsu country drawing

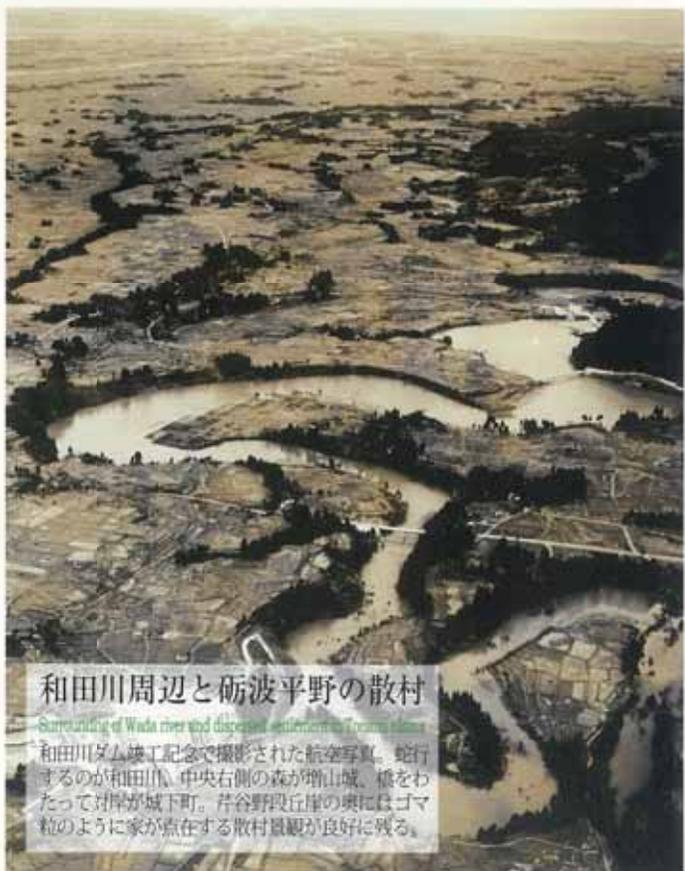
紀伊徳川家の南癸文庫に伝わる古写図である。慶長年間に描かれたと考えられるが、増山城がすでに「増山古城」となっており廃城時期に示唆を与える。城下町が「増山町」となっているので廃城後もしばらく町が存続していたことがわかる。



石垣

Stone wall

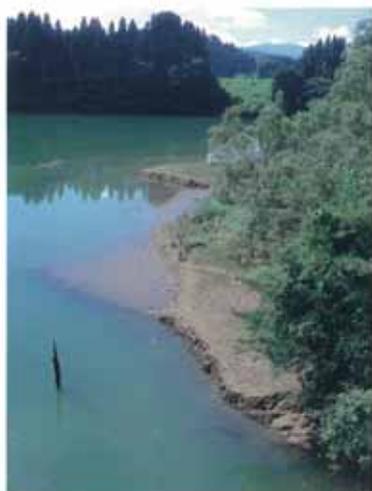
二ノ丸手前に唯一の石垣が残るが、いくつかの石が集落に下ろされたという伝承がある。増山神社鳥居の二石、集落内の地藏堂の基礎石がそれである。



和田川周辺と砺波平野の散村

Surrounding of Wada river and dispersed settlement in Etsu plain

和田川ダム竣工記念で撮影された航空写真。蛇行するのが和田川。中央右側の森が増山城。橋をわたって対岸が城下町。芥谷野段丘岸の奥にはゴマ粒のように家が点在する散村景観が良好に残る。



城下町の発掘調査

Excavation of bourg

ほ場整備に先立って昭和52年に試掘。柱穴や井戸とともに16世紀末～17世紀初頭の遺物が多く見つかり、城下町の存在が改めて確認された。その後、遺構は盛土保存されている。左上は、ダム湖に沈んだ城下町の「下町」。



可視の領域

Range of view

亀山城山頂からの眺望のきく範囲をピンクで図示したもの。越中西部の主要な城がほとんど見ることが可能だとわかる。城の立地を考える上で重要なデータ。



JR 城端線油田駅からタクシーで 15 分
 北陸自動車道・砺波 LC から車で 15 分
 市営バス・東校若線 砺波駅前乗車→石坂下車 (30 分) 徒歩 15 分

増山城跡ガイドブック

◎編集・発行

砺波市教育委員会 文化財室

〒932-0393 富山県砺波市庄川町青島 401 番地

TEL : 0763-82-1918 FAX : 0763-82-3521

E-Mail : bunkazai@city.tonami.lg.jp

この板は、富山県三大樹のひとつマサヤマスギの板材。江戸時代、藩有林として手厚い保護のもとスギの固有種として確立されたマサヤマスギは、良質の建材として知られています。富山県を代表するブランド樹種といえます。